

2,560×1,440ドットの27インチColorEdgeが登場！ 色彩再現と暗部再現能力がさらにアップ

EIZO ColorEdge CX271

●発売日：2013年11月22日
●実勢価格：149,800円前後※

【スペック】パネル：IPS（パングレア）／サイズ：68cm（27インチ）／推奨解像度：2,560×1,440／視野角：178度（水平／垂直）／輝度：300cd/m²／コントラスト比：1000：1／入力端子：DisplayPort×1、DVI-D×1、HDMI×1／大きさ：646（W）×425～576.5（H）×281.5（D）mm／重さ：約12.7kg

※EIZOダイレクト価格。ColorNavigator、キャリブレーションセンサー別売

レポート：榊 信康
写真提供：萩原俊哉



11月22日、EIZOのハードウェアキャリブレーションモニター ColorEdgeシリーズの新鋭機として ColorEdge CX271が発売される。その型番からわかるようにColorEdge CX270の後継モデルに位置づけられている。CX270で好評を得た多彩な機能を継承しつつ、細部の見直しと強化を図ったモデルだ。

モニターのサイズは27型（16：9）と大きく、A4原稿を寸寸で見開き表示してもまだ表示域に余裕がある。これだけ表示域が広いと視野角に懸念が残るかもしれないが、IPS方式のパネルを採用しているため、ほぼ真横から眺めてもしっかりと確認できる。さらに均一性の確保にも余念はない。EIZO独自のデジタルユニフォミティ補正回路を搭載することにより、表示域全体において均一性の高い安定した表示を可能にしている。また、本機ではパネル面のギラつきにも気を配ったことだ。表示

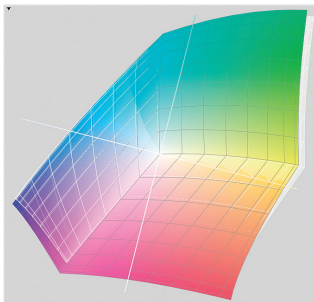
性能についてはCX270とほぼ同等だが、シャドウの再現力が向上したことは写真ファンにとって朗報といえるだろう。また、色域もやや拡大し、従来のAdobe RGB比97%から99%へと向上している。

ColorEdge CXおよびCSシリーズが持つ最大の特徴は、モニター内部に組み込まれたコレクション（補正）センサーの存在だ。コレクションセンサーはセルフコレクション機能と連動しており、あらかじめユーザーが指定した時間が経過すると自動的に起動してモニターを測定し、補正してくれる。キャリブレーションではないものの、コレクションを行うだけで表示精度が保たれる。新たな要素としては、従来では専用ソフトColorNavigatorを使わないと更新不可能だったカラーモードに対しても自動調整が行われるようになった。目的に応じてカラーモードを使いわけている人にはありがたい拡充である。

そして、ColorEdgeシリーズの肝であるハード

ウェアキャリブレーションについては、従来どおりColorNavigatorを用意している。詳細は別枠に譲るが、操作と見た目はシンプルながら機能は豊富であり、プロ、アマチュアを問わずに活用できるだろう。インターフェイスの豊富さもColorEdgeの魅力。CX271ではDVI-D、HDMI、DisplayPortの3種を各1基ずつ搭載している。CX270ではDisplayPortのみ10ビット入力が可能だったが、HDMIでも10ビット入力に対応した。さらにCX270ではHDMI入力時の解像度は1,920×1,080までだったが、CX271からはすべての入力が2,560×1,440対応となった。販売形態はモニター単体販売の他に、キャリブレーションセンサーとColorNavigatorを同梱したセットモデルの「CX271-CN」と、既にセンサーを所有しているユーザーのためにColorNavigatorのライセンスのみをセットにした「CX271-CN」を用意している。

▶ Adobe RGBカバー率が99%



ColorNavigatorでパネルネイティブの色域を測定した結果とAdobe RGBの色域をColorSyncで比較した。色の付いた部分がモニターネイティブの色域、グレーの部分がAdobe RGBの色域で、ほぼ全域をカバーできている

▶ 高速PWM調光でチラつき軽減

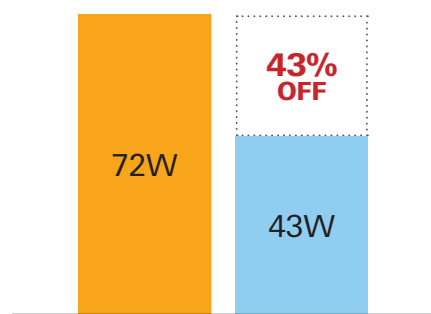
バックライトがLEDに切り替わるにつれて、再びフリッカーの問題が出始めている。そこでCX271ではPWM調光の周波数を人が感知できないレベル（約18,000Hz）にまで引き上げることにより、フリッカーを抑制している

▶ 視野角が広いIPSパネル



CX271に搭載されたIPSパネルの視野角を見てもうらためた正面、横15度、横30度、上方からモニターを撮影した。いずれの写真においても白浮きのない鮮やかな表示が確認できている

▶ 広色域LEDで消費電力40%減 ▶ 暗部の再現力UP



液晶のバックライトにLEDを採用することにより、消費電力を最大時99W、標準時43Wにまで抑制することに成功している。CX270と比較した場合、約40%もの低減となる



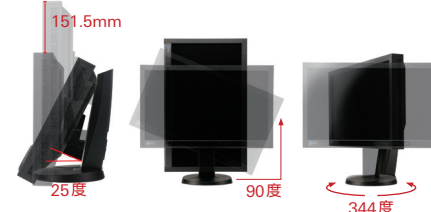
液晶パネル、とくにIPS方式は光漏れや白浮きを抑えるのが困難とされるが、CX271は暗所で眺めても白浮きの少ない締まった黒を再現できている

▶ 全ポートで2,560×1,440対応



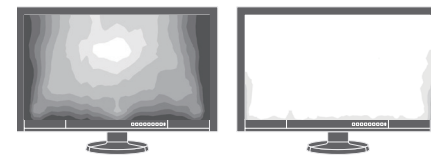
DVI-D、HDMI、DisplayPortの入力ポートを各1基ずつ搭載。従来はHDMIのみ1,920×1,080までだったが、今回からはすべてのポートが2,560×1,440対応となった。各入力にはそれぞれ1基ずつキャリブレーションモードが用意されるため、複数の入力を切り替えている人は非常に重宝するだろう

▶ 調整幅の広いスタンド



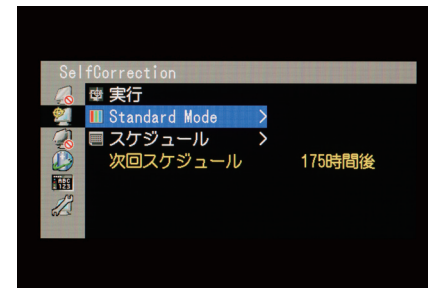
チルトは25度、スイベルは344度と調整幅は取っている。昇降範囲も約151.5mmと広く、パネルの下端を設置面まで下げることが可能。ピボットにも対応し、縦位置の写真やレタチャする場合にもモニターの表示域を存分に活用できる

▶ 画面の隅々まで均一に表示する



CX271にはデジタルユニフォミティ回路が搭載されており、画面全体の輝度と色度を均一になるように補正してくれる。周辺環境の変化にも対応するため、オフィスユース、ホームユースを問わずに安定した表示が行える

▶ プリセットモードの調整



CX271では新たにStandard Modeキャリブレーションという機能が加わり、ColorNavigatorを使わなくてもモニターのプリセットカラーモードを更新できるようになった。この作業は本体メニュー「SelfCorrection」かColorNavigatorのメイン画面から「高度な機能」→「Standard Modeキャリブレーション」を選択することで使用できる

▶ ColorNavigatorでキャリブレーション



あらかじめ「Web向けコンテンツ」「写真用」「印刷用」の3種類のプリセット値が用意されており、大抵の用途ならばここから選ぶだけでことは足りる。目標値を指定するには「調整目標作成」を選択して、色再現域、輝度、白色点、黒レベル、ガンマを設定する。この他、プリントメディアを測定した結果や、モニタープロファイルから目標値を読み込むことも可能だ。測定後は右図のような画面が出るので、検証を行うか終了すればよい。調整後には手動による6色調整（補正という点では難があるが、機器間の齟齬を目立たなくする意味はある）なども行える

撮影時に感じた空気感まで再現されているようだ！

現在、EIZOの24型モニターを使用している。さほど不満はないと思っていたのだが、実際にCX271を使ってみるとその考えを改めさせられることになった。まずはモニターの再現性の向上だ。シャドウの締まりがありながら豊かな階調が得られていることを実感する。たとえばロー



キー表現ではシャドウの階調の再現がポイントとなるが、階調豊かなCX271なら作品の追い込みを強力にサポートしてくれるだろう。また、写真のヌケがとてもいいことも感心した部分だ。すっきりとした青空、紅葉の鮮やかさが脳裏によみがえってくる。透明感とでもいえばいいのだろうか、凛と澄んだ秋空の空気感までも再現しているような印象だ。さらに27型ともなると作業領域がとてつもなく広くなり、視認性が大幅に向上することが実感できる。細部に至るまでのチェックなど作業効率も抜群だ。

シャドウの階調再現の良さが実感できる。また作業領域の広さは、作品の追い込み作業の効率をいっそう高められる



萩原俊哉



縦位置で撮影することも多いので、簡単に縦に変更ができるのもありがたい。高山ならではの抜けるような青空、そして締まりのよいシャドウが、より鮮やかな紅葉を引き立ててくれる

